
異世界譚第二幕 HUNTER × HUNTERの世界で

風ノ華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界譚第二幕 HUNTER×HUNTERの世界で

【Nコード】

N2678BA

【作者名】

風ノ華

【あらすじ】

崩れていく身体、尽きていく命、ほぼ見えない目で最後に見たのは少女達の泣き顔。
悲しいかもしれないが泣かないでくれ。俺は二度目の生も十分に生きた。

この物語は一つのIFエンドから始まる新しい異世界譚である。

キャラ崩壊、原作破壊、作者の表現方法などに嫌悪を抱く方は読むのを控えてください

第00期「終わり×目覚め×三度目の生」(前書き)

1作目2作目共に停滞気味にもかかわらず、新しいのを投稿することになりました。

もちろん、全て完結を目指して書き続ける予定なので長い目で読んで下さい。

第00期「終わり×目覚め×三度目の生」

「暗黒魔闘術究極奥義・魔王破滅拳!!!」

自らの身体と命を魔力に代え、落下してくる浮遊要塞へと叩きつける。

身体が崩れ意識が失われていく。

もう聞こえるはずのない耳に俺を呼ぶ声が聞こえる。

かろうじて視力が残っている右目で声のしたであろう場所を見る。

瞳に映るのは自らの従者となった彼女達と自らが認めていた彼女。

最後に残った意識とカス程の魔力で自分の思いをカードに伝える。

お前達に会えて、よかった。どうか、生きていてくれ。

願わくばこの思い、今この場にはいない彼女にも届いてほしい。

そして俺はこの世界から消えた。

目を開くと暗がりの粗末な部屋だった。

光はガラスの割れた窓の外から射してくる月の光のみ、家具もボロボロの物ばかり。どうやら廃墟のようだな。

「ここは…。」

確かに俺は死んだはず…。体を起こし自分の状態を確認する。

悪魔の翼以外の体には変調なし、魔力も十全、魔眼も…どうやら発動可能だな。

神様ヘラさんから貰った力も使えそうだし、自分の記憶もしっかりしてる。

あとは周りの状況だが…。

「気がついたか。」

声に振り向くと黒髪をオールバックにし、額には特徴的な逆十字の模様が刻まれている男が部屋の入口に立っていた。

その立ち振る舞い、醸し出す気配、そして肌に纏わりつくこの嫌な

感じ、その男がかなりの強者だということがわかる。

「アンタは…?」

「ついてこい。」

男は俺の質問に答えず、踵を返し部屋から出ていった。

「チツ、質問に答えろよな。」

粗末なベッドから抜け出し男の後を追う。

男は俺がついてくるのを一瞥するとゆっくりと歩きだした。

「（どういうことが起きてこうなったかはわからないが、まずは状況を確認しないと。）」

とりあえず今気になるのは目の前の男だ。

前を歩く男からは魔力は感じない、だがそれを補って余りあるほどの気を感じる。かなりの強者だといったが、少なくとも見積もっても全盛期の詠春の力を軽く超えるのではないだろうか。

それにこの男の纏っている雰囲気、俺と同様沢山の血を吸ってきているな。

「お前、名は何という?」

男は振り返りもせず名を聞いてくる。

「神風 翼だ。」

「…ジャポンの人間みたいな名前だな。」

ジャポ^ン? 日本が訛ったのか?

それにしても目の前を歩く男、何か記憶に引っ掛かる。

「おい、こっちは名乗ったんだ、お前も名前くらい教えたらどうだ
?」

その言葉に男は歩みを止めこっちに向き直る。

「そうだったな、俺は。」

クロロ・ルシルフルだ。

【続く】

第00期「終わり×目覚め×三度目の生」(後書き)

第1作目のEFエントから始まる物語です。

更新は遅いと思いますが、長い目で読んでくれると嬉しいです。

第01期「戦い×説明×勧誘」

「おい、早く付いて来い。」

目の前の男　　クロロの言葉にハツとし後を追う。

俺が追い始めたのを見てクロロはまた歩き出す。

『クロロ・ルシルフル』、俺が元居た世界、つまりはこの体に転生する前の世界にあった漫画『HUNTER×HUNTER』の中の登場人物。

記憶力には自信があるが、もう五十年以上前のことだから物語の詳細なんて既に忘れている。

まあ物語の詳細なんて意味はないか。それは前の世界で知ったことだからな。

何故あの世界で死んだはずの俺がこの世界に同じ体で生きているかは知らないが後悔だけはしないようにしないと。

部屋から出て数分したところで声が聞こえてきた。

馬鹿でかい笑い声に数人の声、まず間違いない幻影旅団のメンバーの声だろう。

「騒がしいな。」

「馬鹿騒ぎが好きなの等が自然と集まってな、だが嫌いではないの

だろう？」

「確かにそうだが、何故それを知っている？」

「その質問にも後で答えてやる。今は黙って付いて来い。」

そう言われては不満だが従うしかないか。だがもしもの時の為に準備だけはしておくか。

「ガッハッハッハッ。」

「ご機嫌だな、ウボォー。」

何かと騒がしい中で一際大きな声で騒いでいる男、ウボォーにクロ口は声をかけた。

「おお、団長。今回の仕事じゃあ割りと楽しい戦いが出来たからな。まあ、まだ物足りねえんだがよ。」

「そうか、ならこの男と戦って見ないか？」

クロ口はそう言って俺を指差す。

「はっ？」

突然何を言い出すんだこの男は…。

「団長、誰だソイツ？」

騒いでいた他の連中も視線を俺に向けてくる。中には殺気を送ってくる奴もいる。

「詳しくは後で話す。どうする、なかなか楽しめると思うぞ？断るなら他の奴に譲るが…。」

「勿論やるぜ！」

楽しめる戦いが出来ると言われてこの男が譲るはずも無い。

無駄だとは思うが一応言うだけは言ってみるか。

「俺の意見は…？」

「情報を知りたければまずは戦ってみせろ。」

やはり拒否権は無いようだ。

逃げたほうが良いのではと考えたがデメリットのほうが多いと判断、さらに旅団の実力と体の調子を確かめるには丁度良いと思いを承した。

屋内では派手に動けないだろうと外に出ることになった。

周りは廃墟だらけで人の気配はない。

興味を持ったのかそれとも暇なのか、他の旅団員も出てきてビルの上でこちらを見下ろしている。

「どれくらいもつと思う？団長がなかなか言っただ、俺は三分と見た。」

「かなりの気^{オーラ}を持てるみたいだけど念はシロートのようだから一分と見たね。」

「ウボオーの力ならあんな奴、三十秒がいいところだろ？」

「じゃあ俺はそっちの男が勝つのに賭けようかな、マチは？」

「勘だけどあたしもシャルと同じかな。」

どうやら暇だったようだ。戦いの様子を賭け事にして楽しむつもりなのだろう。賭けていない残ったメンバーはやれやれといった感じで見ている。

それにしても着流しの奴と怪しい格好の奴とジャージの奴は特に後者の二人は弱いと判断したのか好き勝手言ってくれるな。

それに引き換えシャルとマチと呼ばれた二人は油断出来んな。そういう意味ではやはりクロロが一番油断出来ない奴だな。

そのクロロはというと分厚い本を開いて本とこちらの両方を見ている。

「じゃ、外野もお待ちかねみたいだし、そろそろ行くぜっ!!」

ウボオーギンはそう言うで一足飛びでこちらへ向かってきた。足元のアスファルトは砕け、風を切り裂き拳を振るう。

「殺^とったぜ!!」

ウボオーギンの大振りの一撃をかわしもせずはその身に受け、ビルへと激突する。

「なんだこの程度か、暇潰しにもならなかったな。シャル、マチ、賭けはお前達の負けだ。」

金を取ろうとしたフィックスの足元に鉄パイプが飛んでくる。

「半ば無理矢理戦わせておいて勝手に終わらせるな。」

土煙の立つ瓦礫の中から翼が出てくる。

「手加減していたとはいえ念を使えない奴がウボオーの攻撃を受けて無傷だと!？」

ジャージの男は驚愕しているが、翼は冷静に状況を把握していた。

「威力は咸卦法を使っていない豪殺居合い拳といったところか。あの程度なら魔力での身体強化だけで問題ないな。」

服と髪についた埃を払いウボオーギンへと向き直る。

俺が無傷なことにウボオーギンの口角が上がる。やはりというか戦闘^{バトル}狂なようだ。

「くらえっ、破岩弾ッ!!」

その声と共に今度はアスファルトの塊が飛んでくるが、こんなものがトウとタカミチの居合い拳で慣れている。

瞬動でウボオーギンの懐に飛び込み魔法の射手を五十本程度拳に纏わせる。

「（ネギ、技を借りるぞ。）^{十ミットム}解放、雷華崩拳！」

拳は鳩尾へと吸い込まれ、今度はウボオーギンが吹っ飛んでいく。

激突した衝撃でガラガラと崩れ落ちるビル。

「アララー、ウボオーを吹っ飛ばしちゃったよ。大丈夫かな、ウボオー？」

シャルナークは楽しげに笑う。他の旅団員も目の前の男の強さに好意的に、というよりは寧ろ好戦的に見ているほうが多い。

ドオオーンという爆音と共に背後の威圧感が増す。

瓦礫から飛び出したウボオーギンは獰猛な笑みを浮かべている。

「ヤバッ。ウボオーの奴、かなり本気になっちゃったよ。団長、止めなくていいの!？」

「…。」

シャルナークの言葉にクロロは本から視線を外し、翼の様子を食い入るように見出した。

「お面白い技使うじゃねえか。ちよつと体が痺れたぜ。」

「タフだな、一応それなりに力を入れたつもりだったんだが少し痺れるだけだとはな。」

拳が当たった部分が軽く焦げているだけでダメージは殆どなさそう
だ。

「お返しに俺の本気を見せてやる！」

ウボオーギンの殺気がビリビリと伝わってくる。どうやら念の力をフルに使うようだ。

自然と拳に力を入れ気力が充実することに苦笑する。以前ラカンか
ら言われたときは否定していたが、どうやら俺も戦闘^{バトル}狂な一面を持
っているようだ。

「ならば俺も力を見せよう。」

全身の魔力を圧縮して構えをとる。

暗黒魔闘術、自らの魔力を圧縮し魔力の性質を変化させ力とする格
闘術。

暗黒魔闘術には何種類か奥義があるが、普通の一撃が相当な威力を

持つ。念の系統でいうところの強化系に属するといっていいだろ。

「それがお前の力か、ゾクゾクしてきたぜ。」

念とは違つとはいえ、それを感じるウボオーギンはかなりの強者だ。ならばさほど手加減は不要だろう。

魔力の密度を更に上げ、次の一撃に備える。

「そいつはよかつたな、じゃあ…いくぜ！」

翼の掛け声と同時に二人は同時に地を蹴った。

「ウオオオオツビッグバンインパクト超破壊拳オオツ！！！」

「暗黒魔闘術奥義・魔人烈光殺！！！」

二人が交差した衝撃で地面は陥没し、周りの建物が余波で崩れ落ちる。

煙が晴れて立っていたのは翼だけだった。

ウボオーギンは向かいの崩れたビルに埋もれていた。

「俺の超破壊拳ビッグバンインパクトを超える奴あ、久しぶり、だ…ぜ…。」

ビルから出てきたウボオーギンだったがよほどのダメージを受けたため、言い終わると同時に倒れるのだった。

「こんなもんだが、俺に賭けなかった奴、残念だったな。」

俺に賭けずに、というよりは好き勝手言ってくれた二人に向けて挑発を飛ばす。

「まさか念も使えない奴にウボオーが負けるなんて…。」

「シャルとマチの二人勝ちかよ。なあ、なんでお前等はあの男に賭けたんだ？」

着流しの男の言葉にマチは

「シャルが何の計算もなしにウボオーに賭けないなんてありえないからね、絶対裏があると思ったんだ。でもまさかウボオーと正面きって打ち勝つなんて思ってもみなかったけど…。」

と呆れながらも賭けに勝ったためか若干その表情は嬉しそうに見えた。

「ちえーっ、折角一人勝ち出来ると思ってたのになあ。」

シャルナークはビルから降りてくると気絶したウボオーを担ぎ上げ

「来なよ、君のこと教えてあげるからさ。」

といつの間にか建物へと戻っていったクロロの後へとついていった。

「さて、何から聞きたい？」

クロロの一言に俺はまず何故自分のことを知っているのかをたずねた。

「この本を見てみる。」

手渡された本をパラパラと流し見る。この世界の言語ではなく英語で書かれていたため、内容は全て理解出来た。

「なるほど、確かに俺はこの本の登場人物のようだ。」

本のタイトルは『魔法世界での黒き翼』、作者不明で尚且つ物語の後半からは白紙の本。どこの誰が書いたかは知らないがこれは『ネギマ』の世界での俺の話だ。

クロロに本を返すと、クロロはパラパラと本を捲る。

「作者は不明で読めない言語で書かれている上に物語りは途中から

白紙、だが愛好家は手放さないといい曰くつきの本。気になった俺は手にいれることにした。」

その愛好家には同情するな。なんていったって相手は幻影旅団、下手な抵抗は即ち死を意味する。

「それでだ、実物を目にしてみればかなりの力がこもった本だったわけだ。だがやはり読めない言語、俺も色々な本を読んできたが解読も出来なかった。正直匙を投げかけたが、ふと思ったことを試してみたら内容が頭の中に次々と入ってきた。」

そして白紙のページの前で本を捲るのを止めこちらに見せてくる。

「そして白紙の前の最後のページを読み終えたとき、本が光ったと思ったら目の前にお前が出てきたというわけだ。」

「ちなみに俺も団長に言われた方法を試したけど、俺にはサツパリ読めなかったんだよね。団長から本の内容を聞いてなかったら俺も損するところだったよ、儲けさせてくれてサンキュ。」

なるほど、試したことはおそらく念の使用だろう、しかもキーとなるのは特別な念の力。理屈は分からないが今の俺はクロ口の念によって姿を得たというわけか。

「じゃあ次の質問だが、お前達は何者だ？あと何度か単語が出てきたが念とは何だ？」

これを聞いておかないと色々と厄介なことになる。初めて会うはずなのに色々知っているとこれからの話し合いが不便になるからな。

「俺達は幻影旅団、盗賊だ。そして念とは簡単に言えば生体エネルギー、オーラのこと。誰もが微量に放っているこのオーラを自在に操れる者を念能力者と呼ぶ。その系統は放出・強化・変化・具現化・特質・操作の六種類に分かれている。」

俺は何系になるのかな？と気になったところでクロロから思っても見なかった言葉をかけられる。

「翼、旅団に入らないか？」

【続く】

第02期「答え×念×旅立ち」

「答えはNOだ。 団員になる気はない。」

「そうか、それは残念だ…。」

俺の言葉にクロロは少しの落胆は見れるがさほど気にしていないように答える。

「意外とあっさりしているな？」

正直もつとしつこく聞いてくるか、もしくは旅団員をけしかけてくると思ってたんだが…。

「無理に言ったところでどうにかなるような奴ではないことはこの本から理解している。」

さっきはパラパラと流し読みしかしていなかったが、あの本にどれだけ詳しく載っているのか確かめてみないといけないな…。

あまりにも濃い内容だった場合は奪って処分しないとイケないな。

と、そうだこれは言うておかないとな。

「まあ団員にはならないが仕事の手伝いくらいはしてもいいぞ。」

「…驚いたな。 てつきり盗みや殺しは嫌なのかと思っただぞ。」

「まあ進んで殺しをしたいとは思わないが、これでも一応義理はあ

るんでね。ただ俺自身はあまり殺しはしないつもりだし、余計な殺しをするつもりなら止めるからそこは理解しておいてくれ。」

「俺達に迷惑がかからないようにするならそれでいいさ。」

「じゃあ、これからよろしく頼む。」

そう言っつて右手を差し出した。

「…何の真似だ？」

それを訝しげに見つめるクロロ。

「握手さ、団員にはならないだろうが友好くらいは結んでもいいだろ？」

「面白い冗談だ。…だが、満更悪い気分でもないな。」

そうしてクロロは今までの笑みとは違い、優しげに笑いながら手を取った。

「じゃあ精孔を開くぞ。強制的に開くから早く纏をしてオーラを留めないと死ぬことになるから気をつけろよ。」

俺が念を覚えたらどうなるのかってことが気になるらしく、念を開花させることが決まった。

纏くらいならオーラが尽きる前に何とかなるだろうということで行されることになった。

クロロは俺の背中に手を当てる。一瞬当てられた部分が熱くなったと思ったら身体から何か抜けていくのを感じる。

なるほど、この抜けていく感覚がオーラか。扱い方は………気や魔力とそんなに変わらないな。

「こんな感じ、か。」

「…存外に簡単にやってくれるな。強制的に精孔を開いた場合、纏を出来ずに死ぬ奴もいるというのに。」

「それは褒めているのか？それとも…。」

「ああ、そうか。お前はアレを言われるのが嫌いだったな、この『バグキャラ』め。」

クククツと笑いながら言うクロロに少し殺意を覚えてしまうのは仕方ないことだろう。

『バグキャラ』この言葉は前の世界で何度も言われたために嫌いな言葉だ。

「次はその留めたオーラを爆発させるイメージを持って。」

イメージ的には魔力解放と同じ感じだろうか。なら、あまり強くやり過ぎないように

「フツ！」

気合を入れた瞬間、突風が巻き起こり地面が陥没し、壁にヒビが入り、天井からパラパラと欠片が落ちてくる。

「…それが練だ。次に、その無駄に強大なオーラを消して気配を絶つ、これを絶と呼ぶ。」

若干呆れながらクロロは一部分を強調して次の指示を出す。いや、悪かったって…。

魔力を抑えるようにオーラを抑えていく。ここでもおぼろ丸の力が役に立ちそうだな。

「絶は完璧だな。最後が発、いわゆる念能力といったところだ。具現化系であれば武器などを具現化するなどの固有の力になる。これらが基本の四行だ、シャル。」

「はいよ。」

シャルナークが持ってきたのは水を張って葉を乗せたグラスだった。

「水見式だ。これで念の系統が分かる。このグラスに練を試してみろ、抑えながらな。」

念を押さなくてもわかってるって。

「翼は何系かな？ウボオーとの戦いから強化系の素質はもってそうだったけど……。」

シャルナーク言葉を聞きながらグラスに手をかざし練を行う翼。

すると、グラスの水が増え、水の色が変わり、塩の結晶が浮き上がり、拳の果てに底のほうから凍りはじめた。

その結果に唖然とする旅団員。クロロも予想外のこと通常より目を見開いている感じだ。

「……………何も言うな。」

翼は何を言われるか分かりきっていたためにそう言うが、

『…このバグキャラめ。』

声を出していない団員もいたが、旅団員の意見が完全に一致した瞬間だった。

「じゃあ行ってくる。」

「翼ならハンター試験なんか余裕で合格できると思うから心配しないけど、フラグだけは作ってこないでよね。」

「？旗なんか作って目立つような真似するわけないだろうが。」

シャルの言葉に首をかしげる翼、そんな翼にシャルはため息をつく。

「全然分かってないし…。マチも苦労しそうだ」「シャル、死にたいの？」「ごめんなさい！」

いつの間にか首に糸を巻きつけられていたシャルはすぐさま謝り脱兎の如く逃げ去った。

「マチ、腕のほうはもう大丈夫か？」

「まあようやく五割ってところかな。」

その両腕にはまだ包帯が巻かれている。

「すまないな、少し傷が残ることになって。やはり俺は変化系が弱いみたいだ。」

「本当だったら両腕をなくしていたところさ、アンタが気に病むことじゃないよ。そんなことより試験、合格しなかったらただじゃおかないからね。」

「それは怖い怖い。肝に銘じておくよ。」

じゃあ、と言って仮宿を後にする。

「さて、今回の主役この物語の主人公に会いに行きますか。」

【続く】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2678ba/>

異世界譚第二幕 HUNTER x HUNTERの世界で

2012年1月11日08時00分発行